

おやすみなさい、仔猫ちゃん!


POLORINKEN MENU:39



ふふっ、きたきた。うん、時間通りね。今日は彼にちよつと刺激的なデートを提案してみたの。満員の路面電車での痴漢ごっこ。ここで彼のベッティングを堪能して、そのあとホテルへ直行。濃密な時間を楽しもうと言うわけ。あと念のため、これはいざと言うとき痴漢を撃退する予行演習も兼ねてるのよ？


打ち合わせ通り、他人のふりで路面電車に乗り込む2人。彼のリクエストへのサーブとは言え、観光日和に地元の制服姿の私は普段以上に目立ってるみたい。そんな体をよじることも難しいほど混雑した車内で、窓外に流れる長崎の街を眺めながら、私は彼…じゃない、憎むべき痴漢が近づくの待ったの。






何駅か過ぎたところでヒップに違和感が走ったわ。振り向くと私に密着するように彼が立っていたの。鋭く睨んでも図々しい痴漢は怯むことなくスカートの上から丹念にヒップを撫で回し続けたわ。その手が下着をずらして股間に滑り込んできたときには、私のあそこはもうグッシヨリと濡れていたの。

彼の指が敏感な部分を押し当てて、回転させるように挟み込んできたわ。焦らすような指使いが下腹部から全身に這い上がってくる興奮をどんどん昂ぶらせて、いつか私は潜り込んだ指の動きに合わせてお尻を振っていたの。そして指先がいちばん感じる部分を挟んだ瞬間、私はあっけなく達してしまったの。



膝が抜けてその場に座り込んだ私の目に映ったのは、はち切れそうに勃起した彼のペニス。まさかこんな場所で見られるなんて。だいたいフェラなんて打ち合わせになかったはずなのに。抗議と不安の入り混じった視線で見上げると、彼は嗜虐の色を瞳に浮かべながら、熱い勃起を私の頬に押し付けてきたの。

私は仕方なくペニスに舌を這わせたわ。最初は早く終わらせたい一心で嫌々だったんだけど、勃起が放つ汗臭い牡の匂いに刺激されちゃって、いつの間にか自分から舌使いを激しくして、袋を口に含んで竿を扱いたり、裏筋を舌でなぞったり、車内の喧騒をいいことに、どんどんフェラに没頭していったの。



突然、彼が私の両肩を掴んで立ち上がらせると、スカートをたくし上げて、戸惑う私の太腿を抱えあげたの。ぬるついた蜜壺に熱い亀頭が埋め込まれて、陵辱の予感に私が声を上げそうになった瞬間、子宮に届くほど深く、一気に彼のものがねじ込まれたの。全身の毛穴が粟立って、大粒の汗が噴き出したわ。

彼を引き離す間もなくグラインドが始まったわ。みぞおちまで痺れるような快感。体重のほとんどを勃起だけで支えられた私は、彼にしがみついて嗚咽を洩らすしかなかったわ。訝そうに見つめる乗客たちの視線に苛まれる私の心を裏切るように、股間から溢れ出る蜜が太腿を伝わっているのが分かったわ。


絶頂が間近に迫ったそのとき、路面電車が終点に着いたの。痴漢の陵辱からようやく解放された私は、その腕を掴むとホテルへ急いだわ。パネルから適当に選んだ部屋へ向かうエレベーターでも彼を睨みつけたまま、この私にとんでもない恥をかかせた男にどんな仕返しをしてやろうかと考え続けていたわ。

部屋に入るなり服を脱ぐのももどかしく、ソファに押し倒した彼の上に跨ってやったわ。わざと彼に背を向けて、2人が繋がっている部分を見せつけるように激しく腰を振ってやったの。痴漢プレイですっかり出来上がっていた私はあっけなく達したけど、彼はまだまだ欲求不満の様子。ふふっ、いい気味。




それでも彼がしつこくじゃれついてくるもんだから、せめて体を洗わせてあげることにしたの。マットにうつぶせになった私の背中をボディソープに塗れた彼の掌が満遍なくマッサージ。ふふっ、いい気持ち。なかなか上手じゃない。ちようとい機会だし、どちらの立場が上か、改めて教えてあげなくちゃね。

ひとりで満足した私は、電車からの汗を流そうと彼を置きざりにしてバスルームへ。すぐ彼が追いかけてきて、しらんぷりでシャワーを浴びる私の身体をまさぐったり、いきり立ったままのペニスを私のヒップに押し付けてきたわ。でもダメ、おあずけ。ふふっ、さっきの仕返しはこんなもんじゃないわよ？



ところが彼はまたいたずらっ気を起こして、背中からヒップへ、さらに敏感なところにまで手を伸ばしてきたの。「もうッ、こらッ！」私が嗜めるが早いか、彼は私の両足首を掴んで引き上げると、仰向けに裏返したわ。「ああッ！ダメッ！」二つ折りにされた私の秘肉を抉って彼の指がどんどん入ってきたわ。

私はのけぞり、腰をびくびくと痙攣させながらも、この快感をなんとかやり過ごそうと頑張ったわ。でも絶妙な箇所を容赦なく刺激してくる彼の巧みな指遣いにはとても抗えなかったの。ところが絶頂を目前にしたそのとき、彼がいきなり指を引き抜いたの。「っ、続けなさいよッ…」私は思わず強がったわ。




けれど彼ったら、もじもじしている私に向かって、
そんなにイキたかったら自分でペニスを挿れてみる
なんて言ってきたの。信じられない！でも、絶頂寸
前のもどかしさに身を焦がされていた私は、彼に言
われるまま、自分から四つんばいになってヒップを
掲げ、ふんぞり返った勃起をあそこに迎え入れたの。

「ああッ…いいッ…」待ちかねた快感に喜悦の汁を溢
れさせる私の媚肉。私は自分の気持ちのいいスポッ
トを勃起に擦りつけるように夢中で腰を振り続けた
わ。「お、覚えてなさいよッ…」あんまり気持ちいい
のが逆に悔しくて、私はプライドを振り絞って呟い
たわ。それが彼の嗜虐性にさらなる火をつけたの。

「ああッ！」彼が背後からいきなり私の両脚を抱え上げる、そのまま膝を割り開いて子供におしっこさせるようなポーズをとらせたの。目の前の鏡には、禍々しいくらい勃起したペニスを深々と啜え込んだ、いま思い出ししても恥ずかしい私の姿が。「ああッ、こんな格好いやッ、いやあッ！許してえッ！」


でも彼はワタシの悲鳴もまるで吹く風。それどころかまるで私の痴態を楽しむかのように、激しいインサートを続けながら、私の体のみだらな反応をしきりに口にしている。私はもう彼にされるがまま、快感と屈辱を享受するしかなかったわ。やがて彼は溜りに溜まった熱い精を私の最奥に向けて放ったの。






彼はその格好のままベッドに移ると私に跨り、ふたりのお汁に塗れたペニスの掃除を命じたわ。私は彼の指遣いに悶えながら、舌に纏わりつく味を隅々まで丹念に舐め取ったわ。彼の上から視線の態度も、姿見に映る痴態も構わず、一秒でも早く続きをして欲しくて、腰をくねらせて自分からおねだりしたの。

いま思うとあれは私のプライドを一枚ずつ剥がして行く彼のシナリオだったのね。そして私はまんまとそれに乗せられたと言うわけ。心の枷がはずれていくのが自分でも分かったわ。私のお口で硬さを取り戻していくペニスがいつもより愛おしくて、彼のお許しが出て、なお夢中でしゃぶり続けちゃったわ。




今度は彼がベッドに横になると、私の上に跨るよう命じてきたの。あのとときの彼の勝ち誇った顔は多分、一生忘れられないわ。遅い屹立を自分から蜜壺に導いて腰を下ろす私。肉槍が膣道を埋め尽くして、ため息が出ちゃうくらいの快感が全身を駆け抜けたわ。彼に言われるまでもなく自然と腰が動いちゃう。

私の乳房や乳首を荒々しく弄っていた彼の両手が私の腰を羽交い絞めにして、まるで重機のような勢いで勃起が突き上げられたわ。膨れ上がった亀頭のエラが熱く爛れた粘膜を擦るたび襲ってくる鮮烈な快感。騎乗位が保てなくなった私は抱きつくように彼に倒れこみ、その胸板のうえで愉悦に喘いだの。



「いやッ、いやッ！またイクッ！イッちゃうのッ！」
後ろから前から、まるでオモチャのように弄ばれる
私。遅しい勃起が引き抜かれるたび鳥肌が立つほど
の快感が立ち、突き入れられると涙が出るような愉
悦が襲ってくるの。小刻みな絶頂が繰り返し繰り返
し押し寄せてきて、休むことすら許されなかったわ。

これまで誰からも厳しい扱いを受けたことがなかつた私は、いままで気がつかなかっただけで、実は荒々しくされると興奮するマゾっ気があったのかしら。こんな犯されてるようなセックスで気持ち良くなれるなんて夢にも思わなかった。そんな私の本心を見透かしたように、彼は会心の笑みを浮かべていたわ。




「ああッ！もうダメッ！お願いッ！一緒に！一緒に
いッ！」愛する男に屈服したい女の媚びはもう隠せ
なかつたわ。汗と涙と涎でだらしなく蕩けた顔も構
わず、彼に懇願したの。私の蜜壺のなかで射精を目
指して硬度を増していく彼の分身。私は牝の本能の
まま、その抽送に合わせて腰を振って射精を促すの。

そして発情しきつたふたりの荒い吐息に獣欲を刺激
された彼も、私の牝壺をこれまで以上に猛烈な勢い
で突き始めたの。全身のばねを使った激しいピスト
ンが私の子宮を容赦なく叩いてきたわ。全身が蕩け
そうになる愉悦に、私はもう腰を振ることすらでき
なくなつて、甘えた声を上げるのが精一杯だったわ。



私が達したと見るや、彼がペニスを引き抜いて私を
引き起こしたの。呆ける私の前で必死にペニスを
を抜く彼の姿に、会議でほかの娘たちが話していた
ことを思い出したわ。自分ならそんなこと絶対にさ
せないってみんなに言い切ったのに、いざ自分の番
がくると、その瞬間を待つことしかできなかったの。

彼の呻き声と同時に跳ね上がったペニスから熱い樹
液が噴き上がった、私の軀を生臭く汚したの。でも、
正直いやじゃなかった。むしろ背筋がぞくぞくしち
やって、まだ精液を噴き出している彼のペニスに自
分から舌を這わせたの。ああ…これが被虐の悦びな
のね…って！、もう最低！信じられない！



そのあとは照れ隠しでふくれて見せる私に、必死に
甘い言葉を繰り返して謝る彼と仲直りのエッチ。さ
っきまでの荒っぽさから打って変わっての柔らかい
腰使用と、耳たぶを甘噛みしながらの愛のささやき
に、私の心もカラダもきゅんとときめくの。うん、
やっぱり恋人同士のエッチはこうでなくちゃね。

普段のふたりの距離を埋めるように、お互いの鼓動
が聞こえるくらい体を密着させて、時間の経つのも
忘れて愛し合ったわ。でも、たまにはさっきみたい
に乱暴なものいかもね。いつもの優しいあなたも
勿論、好きだけど、獣っぽいやうか、壮っぽい
あなたも悪くなかったわよ？ うふふつ。

